

9. 下顎第2乳臼歯、第2小臼歯同時抜去にともなう隣在歯の動態について

曾矢猛美，菅原準二（歯科矯正）

本研究の目的は、下顎第2乳臼歯、第2小臼歯同時抜去5例の抜歯直後から永久歯列完成までの下顎第1大臼歯の動態の観察である。また、第1小臼歯抜去症例および非抜去症例おのおの5例の下顎第1大臼歯の動態を比較し検討した。平均観察期間は3年6カ月であり、全例ともこの期間中に歯牙移動や保隙処置を行っていない。資料には側方頭部X線規格写真を用い、それらを透写後 Björk の方法で下顎骨の重ね合わせを行なった。

その結果、

1) 下顎第1大臼歯の近心傾斜度は、非抜去症例で平均 0.4° 、下顎第1小臼歯抜去症例で平均 0.3° 、下顎第2乳臼歯、第2小臼歯同時抜去症例で平均 4.9° であった。

2) 下顎第1大臼歯の近心移動量は、歯冠部において非抜去症例で平均1.7 mm、下顎第1小臼歯抜去症例で平均3.1 mm、下顎第2乳臼歯、第2小臼歯同時抜去症例で平均4.2 mm、歯根部においてはそれぞれ平均1.5 mm, 2.9 mm, 2.9 mmであった。

これらより、下顎第1小臼歯抜去症例における下顎第1大臼歯は観察期間内においては比較的歯体移動をしていた。下顎第2乳臼歯、第2小臼歯同時抜去症例では5例とも近心傾斜を認めたが、その程度は早期抜去例ほど小さかった。また、非抜去症例の歯冠部の近心移動量を生理的近心移動量とすると、これを考慮しても第2乳臼歯、第2小臼歯同時抜去症例では平均3.5 mm 近心移動したことから、臼歯関係が Class II の Discrepancy 症例には有効な咬合育成の方法であることが示唆された。

10. 思春期早発症2例における歯の萌出と顎顔面形態に関する考察

遠藤隆一，三谷英夫（歯科矯正）

思春期早発症は、一般に異常に早い第二次性徴の発現を示し、同時に暦齢に対して極端な骨成長の亢進を認める。本報告は、これまでに本学歯学部歯科矯正科で発見された患者で、暦齢に比して骨年齢が異常に亢進していた患者女子2名について、その初診時の検査、頭部X線規格写真、オルソパントモグラフ、身長増加曲線の観察を行い、歯科矯正学的な見地から考察を試みた。患者は、いずれも骨格性下顎前突症の状態を示

していた。

第1症例は初診時暦齢8歳5カ月で、暦齢と骨齢の差は、ほぼ6年、初潮の発現は6歳6カ月であった。しかし、歯根の形成度、歯の萌出等から判断した歯牙年齢は、ほぼ暦齢に近い発育状態にあると判断出来た。又、下顎骨の成長に関しては、量的に明らかな亢進が見られた。

第2症例は、初診時暦齢8歳9カ月、骨齢と暦齢の差はほぼ6年、初潮の発現は9歳7カ月であった。歯牙年齢は第1症例と同様に骨齢ほどの発育状態を示さず、下顎骨の成長に関しても量的に明らかな亢進が見られた。

これらの結果から、思春期早発症においては、歯牙年齢は骨格系の成長進度と必ずしも一致するものではないこと、又、下顎骨においては、通常思春期に発現する下顎骨の成長加速現象が、この異常な全身骨格系の成長変異に対応して早期に発現すると考えられることが示唆された。

これらのことより、骨成長に病理的素因を有する矯正患者の治療には、その全身的な成長の動向を、詳しく把握する必要があることが指摘された。

11. 模型実習で製作した上顎全部床義歯の口蓋形態に関する検討

中嶋あつ子，伊藤秀美，平塚 裕，弘瀬良治
山田清太郎，鈴木達夫，鹿沼晶夫（歯科補綴2）

全部床義歯で発音機能との関連が考えられるのは、人工歯の排列位置、床の大きさ、厚さ、形、咬合の高さ、口蓋部・歯槽部に付与された形態などである。特に上顎S状隆起の形態がサ行などの発音と関係している事は臨床上よくいわれている。

今回、模型実習において製作された上顎全部床義歯74個のモアレ縞規格写真などを用いて、口蓋部の幅径・長径・高径およびS状隆起部について、9本の基準線と各計測部位を設定し、デモ用義歯と比較検討した。

口蓋部の幅径・長径・高径および歯列の幅径・長径の平均値、標準偏差、変異係数および示数値から、口蓋前方部の幅径・長径・高径に変動の大きいことがわかった。また口蓋前方部のS状隆起の形態は、正中矢状断面で型H（前歯部歯頸部から左右犬歯を結んだ線付近までほぼ水平な面を持つ型）、型S（ほぼ直線的に口蓋最深部まで下がる型）および型C（始めはゆるやかに、次第に急な斜面をもって最深部へ向かう型）の3つに、第二小臼歯付近での前頭断面では、型P（急なカー